伝わる！説得できる！「ストーリーシンキング」をビジネスの新たな武器に

日経ビジネス
Associé
2011年8月16日発行・発売（毎月2回第1・第3火曜日発行・発売）
第10巻第15号通巻235号　2002年10月3日第三種郵便物認可
日経ビジネスアソシエ
2011
09/06
定価590YEN

"ゴール"が見えれば、伝わる！説得できる！

ストーリーシンキング

「残念な人」を抜け出す
即効 論理思考

ビジネスストーリーは「空・雨・傘＋HTD」で考える
「思いつき」を「論理」に変えるテクニック
ハリウッド映画に学ぶ物語の"型"
「問題解決」鉄板4パターンを丸暗記
ストーリーを磨く論理思考のフレームワーク

特集2
夏ボケを一掃！仕事の効率がみるみる上がる！

集中力アップの達人ワザ

毎月第1、第3火曜日 発売

日本語「語感」向上術【第1回】

人の「呼称」を意識して使い分けよう

ビジネス会話での相手への印象、話の伝わり方は、言葉の選び方によって大きく変わる。「語感」を重視した話し方レッスンの第1回は、「呼称」の使い方を取り上げる。

Aさん「部長、紹介します。うちの奥さんです」

部長「はじめまして。いつもお噂は伺っています」

この会話に違和感を覚えますか？

夫が妻を呼ぶ呼び方は実に様々。「奥さん」は、基本的に相手の妻を呼ぶ時に使う言い方。「うちの奥さん」は、部下の前でちょっとジョーク交じりで言うには問題ないが、上司の前では「家内」や「妻」を使う方がいい。「家内」を使う人は年配者に多いが、働く妻を持つ人だと違和感を覚えるかもしれない。相手が部下や後輩、同僚なら「うちの女房」と砕けて言うこともある。

配偶者の呼び方は様々だが、無難なのは「妻」「夫」

男性の場合

妻 … 配偶者を呼ぶ一般的な呼称

どんな場合でも通用する一般的な呼び方だが、「妻」が夫と同等の立場で仕事を持っていたり、収入が高い場合に使用頻度が高くなることが多い。

奥さん … 相手の配偶者を呼ぶ時に使う

基本的に自分の配偶者を呼ぶ時には使わない。ただし、夫が他人に「恐妻家なんです」と言える関係では使うこともできる。暗に妻を立てている感じを伴う。

家内 … 伝統的な配偶者の呼び方

本来は家の中で暮らす女性を表す。たとえ妻が外で働いていても「妻＝家内」と習慣的に使う人が多い。公式の場では、年配者だけでなく、若い人も使う。

嫁 … 息子の妻を呼ぶ時に使う

「嫁」は自分の息子の妻を呼ぶ時に使うが、関西では妻を「嫁」と呼ぶ風習があり、関西系芸人の影響からテレビなどを通じて一般にも広まったと考えられる。

女性の場合

夫 … 配偶者を呼ぶ一般的な呼称

どんな場合でも通用する呼び方だが、「妻」と同様に、配偶者との距離を感じさせるやや堅苦しい呼び方と感じる人もいる。

主人 … 主従関係を連想させることも

一般的によく使われる呼び方だが、若い女性の中には「主人」は「召使い」を連想させるので使いたくないという意見もある。

旦那 … 自分や他人の配偶者を呼ぶ時に使う

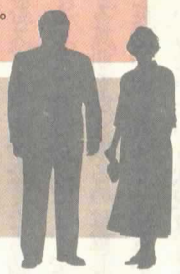
室町時代くらいから使われている表現で、商店の奉公人が主人を、商人が客を呼ぶ時などに使われていた。ビジネスの場では「夫」を使う方が無難だ。

パパ … 子供がいる家庭で使う

「うちのパパ」や「パパさんはどんなお仕事を？」など、子供がいる人同士で、自分や他人の配偶者を呼ぶ時に使う。基本的にビジネスの場では使わない。

その他

配偶者の呼び方は、他にも、「相方」「パートナー」「うちのやつ（人）」「連れ合い」「かみさん」「女房」などがある。どの言葉を選択するかは、使うシーンや相手との人間関係を考慮したうえで選ぼう。例えば、「うちのやつ（人）」は、親しい間柄でないとぶしつけな印象を与えてしまう可能性がある。



同じ意味合いの言葉でも、微妙に受ける印象が違う。そんな「言葉が持つ感覚」を「語感」と呼ぶ。語感をうまく使い分けて会話をすれば、相手に心地よい印象を与えられるが、使うシーンを間違えると信用を失うことがある。言葉の選び方で、プレゼンや交渉の成否が決まることさえあるのだ。

本連載では、語感を重視した言葉選びの基礎知識や活用法を紹介していく。第1回は、人の呼び方「呼称」について取り上げる。

「うちの奥さん」は間違い

日本語における呼称の数は、世界の言語の中でも特に多い。例えば、部下（後輩）の呼び方も、「～くん」「～ちゃん」「君（きみ）」「おまえ」…とたくさんある。当然、それぞれ語感は異なるが、「何となく」で使い分けられていることが多い。そんな曖昧な使われ方をしている呼称を、ここでは配偶者の呼び方を例に考えてみたい。

男性が配偶者を誰かに紹介する時、「妻です」と紹介するのが最も

部長「D社との交渉は、おまえに任せるよ」

Aさん「はい。頑張ります」

部下や後輩を「おまえ」と呼ぶのはぶしつけな印象があるが、これが同じ学校を卒業した先輩・後輩の間柄であるとか、お酒をよく一緒に飲みに行くなど、親しい人間関係が成立していれば、逆に親しみを持った呼び方になる。

例えば、部下（後輩）の名前が「佐藤」だった時…

佐藤さん … 話し言葉では最も一般的

「～さん」は、どんな場合でも使える一般的な呼び方。対等な人間関係を表す一方で、親しみはあまり感じられない。親しみを込めたい場合は、相手の反応も考えて他の呼び方を選択しよう。

佐藤くん … 親しい年少者や男性に使う

上司や先輩に「信頼されている」と感じる人と、「見下されている」と感じる人の2通りがある。上司が女性の場合、「～くん」と呼ばれて抵抗を感じる男性部下もいる。

サトちゃん【あだ名】… 親しみを持った呼び方

相手に親しみを持っていることを示す時に使う。「親しい間柄」ということを他の人に誇示する時にも使われるが、それを好ましく思わない人もいるので注意しよう。

君（きみ）… 年長者が年少者に使う

上司が部下に対して使うことが多く、女性が年少者の男性を呼ぶ時にも使う。距離感を感じさせる呼称で、「早く名前で呼んでくれないかな」と思う人も多い。

おまえ … 相手が目下の場合に使う

明治時代初期までは相手に敬意を払う用法で使われたが、現代では相手が目下の場合に使われる。相手と良好な人間関係ができていることが必須。

部下（後輩）を他人に紹介する時

「こいつ」は目下の者に使う、軽侮な呼び方であり、よほどの「身内意識」がない限り使うべきではない。もし親しさを表現したいなら「部下の佐藤が担当します。ちなみに私はサトちゃんとニックネームで呼んでいます」などの表現ができる。

部長「担当するのは佐藤です。よろしくお願いいたします」

部長「担当するのはこいつです。よろしくお願いいたします」

一般的だ。だが、右ページの会話例のように「うちの奥さん」という人も多い。かしこまった「妻」という呼び方を避けて、親しみを持って「奥さん」と呼んでいるのかもしれないが、本来は「○○さんの奥さん（奥様）は…」と、相手の妻を呼ぶ言葉なので使い方としては間違っている。ビジネスの場では、やはり「妻」と呼ぶ方が無難だろう。ただし、妻に頭が上がらない人が自虐的に「うちの奥様には頭が上がらなくて…」と言う時には使っても構わない。「嫁」や「家内」などとの違いも、覚えておくといいだろう。

一方、女性が配偶者を紹介する場合は、「夫」や「主人」が一般的だ。「夫に仕えているわけではない」と「主人」と呼ぶことに抵抗を感じる人もいるが、あまり気にしなくていいだろう。相手の夫を呼ぶ時も「ご主人（様）は～」と使っていい。

呼称は話す相手との人間関係（立場が上か下か、親しいか、恩恵があるか、仲間内かなど）で異なる。仲間内であれば、妻を「うちのやつ」と呼ぶこともあるだろう。幼稚園や小学校では、夫のことを「うちのパパ」と呼ぶ女性も多い。使用シーンだけでなく、相手との人間関係によって使い分けよう。

呼称の違いを意識するようになれば、上司（先輩）が部下（後輩）を呼ぶ時も、「『おまえ』と呼ぶのは、良好な人間関係を築いている場合だけ」と考えられる。それを分かっていれば、親しみを込めた「おまえ」が使える。

呼称の語感をうまく活用している例では、海外ドラマ「刑事コロンボ」がある。とぼけた刑事が「うちのかみさんは～」と語るシーンは、「かみさん」と訳しているからあの個性的なキャラクターが生きている。「うちの妻は～」だったら面白みが全くなかっただろう。

佐々木瑞枝さん
Mizue Sasaki

武蔵野大学大学院教授
京都府生まれ。山口大学や横浜国立大学の教授職を経て現職。エコールプランタン日本語教師養成講座講師。専門は日本語学。『日本語を「外」から見る』（小学館101新書）、『外国語としての日本語』（講談社現代新書）など著書多数。
http://www.nihongonosekai.com/